

会報
峠
とうげ

河井継之助記念館
友の会会報
第3号
2008.12

編集・発行 /
河井継之助記念館
新潟県長岡市長町1丁目1675-1
〒940-0053
Tel.0258-30-1525
Fax.0258-30-1526
頒布価:50円(送料別)



第2代友の会会長就任のごあいさつ

友の会会長 下田 邦夫

平成二十年(二〇〇八)五月五日、河井継之助記念館友の会会長の原信一さんが急逝されました。記念館設立委員長として、河井継之助顕彰の先頭に立ってこられた原信一さんの急逝は、当会にとっても大きな痛手となりました。

問であることは、ご存知だと思います。その陽明学は、知行合一を以って完遂する特徴を持っています。その基本は良知であります。良知は知る活動をするだけではなく、他人をも慈しみを持つことだといわれています。

その後、七月二十五日の理事会において、第2代友の会会長を仰せつかりました。そこで私の所信を述べて、ごあいさつとさせていただきます。

言志録に「愛敬の心は即ち天地生々の心なり」とあります。すなわち、人を愛し、互いに敬う心を持つことが、天地の万物を生か生きと育てるものだという訓えがあります。私たちの友の会も、河井継之助の精神を通して、そうありたいと思っています。

敬愛する前会長の原さんの愛読書は『言志録』や『伝習録』でした。河井継之助の思想を知ろうと、斯様な書物を読むことは勿論ですが、その実践を伴うよう努力をしたいものです。

時、あたかも直江兼統の慈愛の心が、NHKの大河ドラマに採りあげられますが、越後長岡はこうした良知の心をもち、知行合一の思想が人材を育んできたといえましよう。

人は一生を通じて修行をし、絶えず進歩することが大切だと思っております。河井継之助が学んだ陽明学では内心の工夫をする学

私たちの河井継之助記念館友の会も、義と愛の精神をもって、

社会を明るくする活動の一端を担うべく頑張っていくたいものです。会員諸兄弟のご協力を切

におねがいし、心から、原信一前会長の遺志を引き継ぐ所存でございます。



記念館庭の大モミジ

短信 友の会ニュース

銅像建立委員会を設置

銅像建立委員長 内山 弘

河井継之助記念館友の会では、平成十九年八月十六日の創立当初から「銅像建立」の希望が多く、その意向を汲むかたちで市当局では今年度予算に像建立費を計上し、像制作について友の会に協力依頼が寄せられた。

友の会では像建立委員会を設置し、数回の会合を経て、

- ① 作家は地元在住で将来性ある方
 - ② 像は等身大の立像
 - ③ 設置は館内
- を基本とすることにした。会の総



河井継之助邸跡の碑

意で選ばれた銅像作家峰村哲也氏の「うで」に期待したい。

松樹植樹委員会報告

当館の継之助おもかげの庭に、ゆかりの地である只見町から、松を移植します。

今春、松樹植樹委員会(代表・田所仁理事)が発足。松樹視察、植樹予定場所の決定、土壌改良が行われました。移植は来春を予定しています。お楽しみに!

峠抄・とうげしやう ②

「河井さんの命日に何かできないだろうか」―友の会と同じように、記念館の支えである河井継之助記念館ガイドボランティアの会。昨年の八月十六日、ボランティアさんの発案で「河井継之助を偲ぶ茶会」が行われ、今年で二回目を数えました。

近所のご婦人方、家族連れ、若いカップル…今まで記念館を訪れたことのなかった人が、「何かやっているのかな、ちょっとのぞいてみようか」という感じで、続々と記念館へ。「美味しいお茶とお菓子でしたよ」「また来年の、河井さんの命日に来ます」そんな嬉しい言葉をかけてくださいました。

今年、宗偏流新潟支部長の小形先生が助っ人として参加され、一段とお茶会らしい、心を込めたおもてなしが好評でした。「長岡の文化の発展の一助となることは、何でも協力したい」という、先生の頼もしい言葉が印象的でした。

この日のために、何日も前から準備してくださったボランティアの皆さんに、心より感謝申し上げます。(嘉瀬)

『峠』の越後長岡を歩く

②

連載

司馬遼太郎著の『峠』に描かれている「越後長岡」の風景を現在に訪ねるシリーズ。今回は、呉服町二丁目の蠟座稲荷神社を歩いてみました。

●『峠』中巻・新潮文庫37ページより「寄せ場」

というものをつくった。城下呉服町裏に御蠟座という建物がある。これを三日で補修し、ここを「寄せ場」にした。

牢屋に似ているが、牢屋ではない。牢屋は別に荒屋敷というところにある。この呉服町裏の寄せ場は、博徒、無頼漢の収容所で、これを懲罰するためでなく、隔離して教育するためであった。

蠟荷の許可証を発行したりもしていました。慶応二年に町奉行となった継之助は、この御蠟座を廃止して、跡地に「寄せ場」をつくっています。

当時、御蠟座の屋敷内に設けられていた蠟座稲荷神社は、同じ呉服町二丁目に現存しています。この神社は、長岡藩主牧野家が鎮火祈願のために創建したもので、代々姫君達が産屋に残蠟を受けて安産を祈られたことから、安産稲荷として厚く信仰されてきました。地域の人々によって守り伝えられ、現在は御蠟座稲荷、または御蠟座さまと呼ばれ、親しまれています。

ちなみに、荒屋敷は、低湿地帯に開かれた町で、侍屋敷地でした。「荒」には「未整理」と「新」という二つの意味があるそうです。荒屋敷町は、現在表町一丁目に含まれており、国道や商店街となつていきます。(樺澤・神保)

参考文献

- 『長岡歴史事典』(長岡市編)
- 『ふるさと長岡のあゆみ』(長岡市編)
- 『長岡城之面影―長岡城下年中行事―』(長岡市立中央図書館文書資料室編)



雪国ならではの冬囲いがされた社殿



明治時代建立のお狐さま



屋根に牧野家の三ツ柏紋



一の鳥居、二の鳥居は中越地震で倒壊、その後再建されたもの

記念館日誌 某月某日

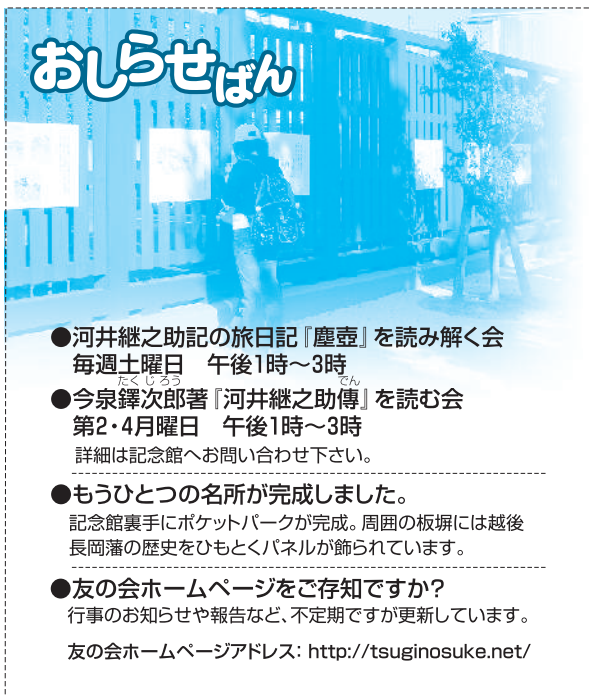
記念館では来館者千人毎に、記念品の贈呈と記念撮影をし、許可を得て館内に掲示しています。

今日来られたスーツを着た五十代くらいの男性。「あそこに貼つてある一万四千人目の写真の者です。また来ちゃいました！」と、愛嬌たっぷりに声をかけてくださいました。その方と二緒に写真に近づくと、「これです」と、照れながら指をさされました。そこには奥様と二緒に微笑んでいる写真が…。

帰り際に、「また来ますねー」と、うれしい言葉を残していかれ、何とも言えない親しみの気持ちでいっぱいになりました。(神保)

おしらせばん

- 河井継之助の旅日記『塵壺』を読み解く会 毎週土曜日 午後1時～3時
- 今泉鐸次郎著『河井継之助傳』を読む会 第2・4月曜日 午後1時～3時
詳細は記念館へお問い合わせ下さい。
- もうひとつの名所が完成しました。
記念館裏手にポケットパークが完成。周囲の板垣には越後長岡藩の歴史をひもとくパネルが飾られています。
- 友の会ホームページをご存知ですか?
行事のお知らせや報告など、不定期ですが更新しています。
友の会ホームページアドレス: <http://tsuginosuke.net/>



河井継之助ゆかりの庭

● パネル紹介

庭が一番よく見える展示室の一角に小さなパネルがあります。ともすれば、見過ごされてしまいがちですが、実は、ここから御覧いただく庭の景色は、当館のおすすめの展示のひとつなのです。

春はふきのとうが顔を出し、木々が芽吹き、夏は山野草や、河井家の家紋であるカタバミの花が咲き、秋はもみじ、冬は雪化粧をした石灯籠など、四季折々に変化する庭をぜひ見ていただきたいです。

パネルには、おまかせの庭についての説明と、継之助の号「蒼龍窟」の由来となった松が写っている写真が載っています。



カタバミの花



フキと渡り石

さらに興味深いこととして、河井邸と僧良寛とのつながりについても書かれています。

継之助の父・代右衛門は勘定頭などの大役を務めたわら、宗偏流をたしなむ茶人であり、良寛と親交があったといわれています。『良寛全集』の中に、良寛が河井邸を訪れた際に詠んだ漢詩が

あり、このパネルで紹介しています。良寛が没したとき、継之助は五歳でした。折しも今年には良寛生誕二百五十年の年にあたり、各地で記念行事が開催されています。

参考文献
『河井継之助』(稲川明雄著)

(神保)



展示室からの庭とパネル

展示品紹介

② 父に宛てた西国遊学を願う書状

縦20cm×横450cm
(長岡市立科学博物館 所蔵)

江戸に遊学していた継之助が、長岡にいる父代右衛門に宛てて書いたものです。備中松山藩(現在の岡山県高梁市)の山田方谷のもとへ学びに行く決意を述べ、その費用である50両を何としても送金して欲しいと無心しています。

山田方谷は、農商の出身でありながら、藩の財務責任者となった人物で、負債整理や産業振興、文武奨励などの改革を積極的に行って成功させ、その名は全国に知られていました。継之助は、江戸で方谷のことを知り、彼こそ実学の人であると考え、藩政改革の手法を学びに行くことを決心します。

長い手紙の中には、両親を気遣う言葉が、始めから終わりまで数多く見られますが、特に「立身行道は孝の終りと申す教えにても相守り度、憤発仕候」という一節が印象的です。



※記念館2階「西国遊歴—の旅」コーナーに展示中。

また、丁寧な文面からは、誤解せず自分の本意を理解して欲しいという継之助の気持ちが感じられ、西国遊学にかかる思いが伝わってきます。

(樺澤)

参考文献
『河井継之助傳』(今泉鐸次郎著)
『入門 山田方谷』(山田方谷に学会編)

河井継之助はどういう人物？

その② 河井継之助の屋敷

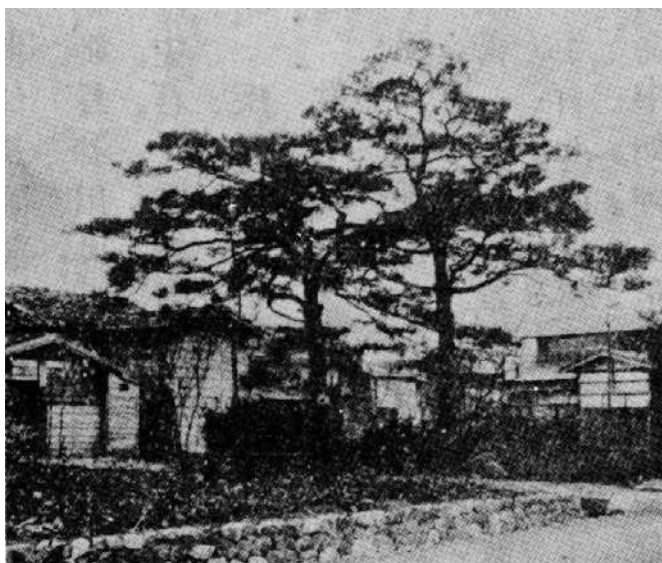
連載

従来、河井継之助の生家は、長岡城下同心町にあったとされてきた。しかし、文政年中の長岡城下図や弘化元（一八四四）年の俊治火事類焼図（『長岡懐旧雑誌』所収）にも、河井代右衛門家は長岡城下長町に存在していた。

著『河井継之助傳』所収の実妹、牧野安子の述懐に基いている。「安子の談に曰く」とし「生家の宅は私が十三歳の折、同心町よりの出火で焼けましたので、長町に新築いたしました。兄が重役になってから神田口へ移りました」

この同心町誕生説は、近年、河井継之助の研究者安藤英男氏が指摘したもので、今泉鐸次郎

これによると長町へ、神田口へといかにも移ったかのように表現しているが、長岡では「に」を「へ」と



河井旧邸の松 『長岡中学読本』所収

発言するところがあり、微妙な解釈で、同心町から長町、そして神田口へ屋敷が移転していくようにとられたのであろう。

今泉鐸次郎の三男省三は、その著『忘却の残塁』のなかで「弘化

元（一八四四）年十月十四日、城下の同心町から出火して、河井家は類焼してしまい、住宅を長町に新築」とあることから、新築の屋敷地を長町に移転したと解釈してしまっただものと思われる。

従って、安藤英男氏の「河井継之助の年譜」は「弘化元年、城下の同心町から出火し、家宅が類焼にあう。この後、長町に移る」とされた。

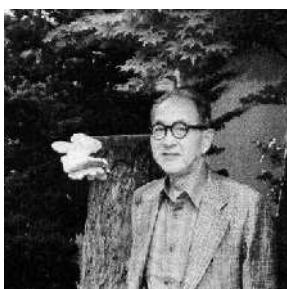
しかも、城下同心町は町同心の屋敷地であり、百四十石取りの藩士の住む所ではなく、疑問視をされてきた。ただ、三代河井代右衛門が郡奉行、勘定頭の職責を問われて、逼塞をさせられたところであると想定されていたが、それも不自然であると疑問視されていた。

近年、小川和也氏の指摘によつて、文政年中の長岡城下図、それに弘化元年（天保十五年）の「俊治火事類焼図」（『長岡懐旧雑誌』所収）によつて、火災以前に河井代右衛門家は長町にあることが確認された。なお、この火災は長岡藩史上二番目の大火で、同心町の町同心伊佐俊治宅からの出火によつて「俊治火事」と呼ばれた。

『長岡懐旧雑誌』などによると、辰年十月十三日夜九ツ時過町同



昭和59年の豪雪で倒れた松の折れ口に武士の顔が浮かぶ（写真提供：羽賀龍介氏）



松の伐り口に大きなキノコが生え月光に光る。手前は羽賀善蔵氏。

心俊治といふ者の宅より出火、折柄、西南之風烈敷」と町屋、寺院、足軽屋敷、家中屋敷、城内建物へと飛び火し、家中屋敷四十軒余、足軽屋敷六、七十軒、給人数軒、町屋およそ千百七十軒余り、寺院三ヶ寺、その他役所、城門、曲輪堀などを焼失させた。

実妹の牧野安子は『河井継之助傳』に兄の思い出とし「兄は火については可笑い程、臆病で

ありました。実に火事程恐ろしいものはない、他人から来る火は仕方ないが、自分から出した火は、取返しがつかぬと平常、自分も家族の者をも戒めて居りました」は、俊治火事の体験に基いているものと思われる。

火は戊辰戦争の際、河井継之助の作戦に用いられたし、吉原の芸妓を火中から救い出した逸話などを考えると、弘化元年十月の火災の体験が、河井継之助の精神形成に大きな役割を担ったことがわかる。

また、異談であるが、河井代右衛門家は、一時、長町のある所に新築し、又、もとの神田口の屋敷に移転したという談を唱うものもいるから、牧野安子の述懐と付号する。（稲川）

「塵壺」を読む

② 連載

河井継之助記念館では毎週土曜日に、河井継之助の自筆の旅日記「塵壺」を読み解く会を開催しています。そこで、話し合われたことや、解明できた謎や不思議、継之助の人間性などを順次、この会誌やそのほかの広報でご報告したいと考えています。



「塵壺」 記念館に展示中 (長岡市立図書館 所蔵)



がたく存じ奉り候」と書き送っている。山田方谷は江戸に三月くらいに来る予定になっていたが、藩主板倉勝静が寺社奉行をやめた

ので、出府が見送られた。では、継之助みずから備中松山まで行くというのである。そのための旅費五十両が、無心されている。備中松山はいまの岡山県高梁市。松山は侍の住んだ所、高梁は城下町であつたらしい。福岡県の福岡が博多と呼ばれているのと同じ感覚であつた。城は高梁市外の北辺にあり、標高約四百メートル。松山は山名。いまでも頂上に天守閣が残っている。

その松山の山田方谷をたずねたいというのであるが、よく江戸藩邸の重役らが許可したものだと思ふ。

『河井継之助傳』には山本勘右衛門と牧野市右衛門が同意したことになっているが、当時山本は国元長岡にいた。どのようにして、許可をとったのかわからないが、たぶん父の代右衛門が奔走したのであろう。

六月四日に退塾した際は、同塾の門人たちから送別会のようなものを開いてもらったらしい。そのときの同門の米沢藩士の送辞がある。武回庵の家に仮寓したのち、六月七日に出発したことになる。

武回庵は百五十石取りの藩医である。継之助の実姉いくの夫にあたる。藩邸近くに武家の屋敷があるかのようだが、藩邸内の武の居所を出発したのが本当のところだろう。

見送りに、在府していた留学生の花輪馨之進・三間市之進・鶴殿団次郎である。三人は見送りを兼ねて、開港間もない横浜を見物しようというのである。

花輪の入塾先はよくわからないが、三間は塩谷岩陰の私塾に入っている。継之助が山田方谷宛の紹介状を塩谷に書いてもらったのは、三間の斡旋によるものだろう。

う。塩谷は高野松陰とも知己であったため、三間の願いを聴いたものだろうが、当時、著名な塩谷の紹介状は貴重であつた。

鶴殿団次郎は東条英庵や手塚律蔵の私塾にいた。東条は長州藩士というが、在江戸にあって、学問を以って禄を食んでいたにすぎない。そのころの鶴殿は全くの苦学生。風呂も入らず、衣服も臭かつたという。

鶴殿のちに蕃所調所の洋数学の教授となつた。神田孝平らと互角な才を発揮し、勝海舟に愛されるが、慶応四年(明治元年)十二月三十八歳で没し、世に出なかつた天才である。(稲川)



鶴殿団次郎墓所 (昌福寺)

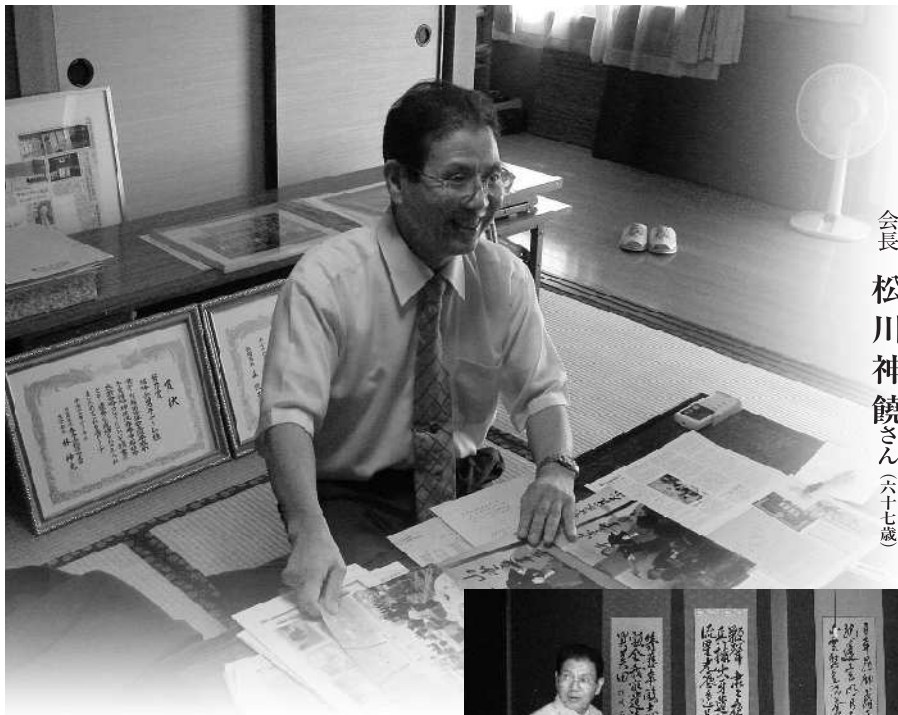


「塵壺」を読み解く会講座風景

漢詩の心を感じて四十年

詩吟神風流福吟会

会長 松川神饒さん（六十七歳）



「書道吟」それは、詩吟の節に合わせ、襖ほどもある大きな紙に書を書くというもの。今年三月、河井継之助おまかげの庭において行われた松川さんの書道吟は、会場を埋め尽くさんばかりに集まった大勢の観客を魅了した。この時披露されたのが、河井継之助にちなんだ漢詩。松川さんたての希望で「河井継之助を偲ぶ漢詩の心を感じて」というタイトルが付けられた。河井継之助を敬愛してやまない松川さんは、どんな思いで筆を走らせたのか…。今回は、そんな松川さんの「原点」を熱く語っていただいた。



只見や会津若松といった戊辰ゆかりの地で、永年に渡り、詩吟をもつて土魂を弔ってきた松川さん。「只見へ行くと、やはり感動しますね。河井さんの墓のまわりで草取りをしながら、涙したことさえあります。河井さんの詩を、河井さんの墓前で朗詠するんですから、それはもう…」塩沢・医王寺。河井継之助の墓所である。

「西の西郷南洲や木戸孝允。彼らもまた、新しい日本を夢見ていた。あの時代は皆がそうだったと思います。継之助と同じように、西の志士にもまた、理想があったんですね」結果的には相容れないものだったが、誰もが日本の夜明けを望んでいた。「南洲の漢詩には、夢であるとか、人生の辛酸であるとか、そういったものが込められているんです」

松川さんは続ける。「私は戦争で父を亡くしましてね、子どもの頃から苦労してきた人間です。『幾たびか辛酸を歴て』という南洲の漢詩は、特に思い入れがあります」心をこめた、大迫力の書道吟を目前に、感動のあまり目に涙を浮か



好評開講中！
松川神饒さん指導による「楽しい詩吟教室」
講座日：毎月第2・4土曜日（変更する場合があります）
時間：午後3時から4時30分
場所：河井継之助記念館 和室
参加費：各回200円（資料代）
お申込み・お問合せは河井継之助記念館まで！

べる方もいらつしやるとか。「漢詩の心を感じてほしい。そこに感動がありますから」表現者として、松川さんは心を感じる体験をしている。「現地の空気を感じる」とこそが、表現者にとつて大事。その発展が中国でした」平成十二年、中国陝西省文化庁から招聘され、漢詩発祥の地で本場の空気に触れた。その後、何度か中国を訪れ、現地の人と漢詩をもつて交流をはかっている。

「道」

「日本古来の伝統文化には全て『道』という字がついています。詩吟も『詩吟道』と言っんです。だから、ただ習うだけではなく『歩む』のです。道だから雑草もある。時には石につまずくことだつてある。山もあり、

谷もある。目的を持ち、努力を重ねる人こそ大成するものだと、私は信じています」河井継之助は、藩政参与のチャンスを与えられるも、門閥に排斥され、道を阻まれたこともあった。しかし、信念を持ち続け、努力を惜しまなかった人である。松川さんの、その最後のメッセージを現代にあらためて問うてみたいと感じた。
(インタビュー／嘉瀬・写真／櫻井)

松川さんの好きな河井継之助の漢詩

逸題

雨晴萬頃緑連空 雨晴れて万頃緑空に連なる
一綫幽蹊芳草風 一綫の幽蹊芳草の風
狂蝶也憐尋舊夢 狂蝶また憐む旧夢を尋ね
翩翩飛繞夕陽中 翩翩として飛繞す夕陽の中を

会員の声



● 維感河井継之助との出会い

生前の祖父と父との会話は必ず山本五十六から始まり河井継之助で終っていた。司馬遼太郎著の『峠』が発行されたその内容から、この様な人だったのかと言う感慨を受けた。これが出会いと言うのだろうか。その後関する物を漁り続けて来ました。この会に参加し講演会、研修会等に出席して、祖父と父が終戦後の先の見えない時、嬉々と会話をしていた事がなにか…これからも各種の機会を捉え、出会った人を理解して行きたいと思っています。

— 青柳好信 (長岡市)

● 一九九九年八月十六日の思い出の齣

今から九年前の八月十六日、「長岡郷土史」の皆様に加えて頂いて福島県只見町の、「河井継之助記念館」を訪れ、墓所を詣でた際の事。二羽の黄色い小さな蝶々が天に舞い上がって行くのが見えた。後にその日が継之助の命日と知り、あるいはあの蝶々は長岡からの来訪者を喜んだ継之助と妻が子の幻の姿であったかも知れないと考えた。けれどその時二羽の蝶々を見たかどうかという事は他の人には聞いてはいない。

— 野沢美代子 (長岡市)

● 「海に泛ぶ」を吟じない

三月二十九日、河井継之助記念館の庭園で河井継之助を偲ぶ書道吟の会が催された。王陽明の「海に泛ぶ」について稲川明雄館長様から、王陽明がこの詩を詠むに至った状況と、

継之助は王陽明の詩を好み、排斥にあつてくじけそうになると、朗々とした声で詩を吟じ、自らを励ましていた事をお聞きした。私はそれ以来、この海に泛ぶを吟ずるたびに、かなわない事はわかってはいるが、継之助の吟を聞きたく思うこの頃である。

— 竹内光子 (長岡市)

● 眞の武士道を生きた河井継之助

陽明学徒である河井継之助は、この思想の先哲である山鹿素行を慕いて眞の武士道を求めて生きた人だと思ひます。幕末から維新までの世を、何を行つたか、どう生きたらよいかを考えていたのではないのでしょうか。家老として長岡藩を自主独立させて発言権を持ち官軍が来襲して来た時どちらにもつかず、官軍にも会津藩にも待つたをかけ、両者の調停役になり両者からいつさいを委任され、そのさばきをする。私はここに感動致しました。

— 石井和彦 (広島県尾道市)

● 継之助の偉大さ

あのむずかしい時代に、結局は戦いを強いられ、一部の町民には恨まれたが最後まで中立を主張し、信念を通じた。それはその後の日本を絶対主義的天皇制軍国主義国家をつくることになった新政府軍に組み込まなかったことにさしひいた先見性もある。日本の封建思想は、この暗黒の時代が終わりをつける日本敗戦の一九四五(昭和二十)年まで、八十年近くも続いたことを考えると、継之助の民

主義(「民者国之本、吏者民之雇」など)を先取りする思想と行動は封建武士でありながら、その業績は革命的思想家とも言える。本当に偉大で、すごい人物であつたように思つた。

— 石丸慎一郎 (長岡市)

● 河井継之助と日本人

幕末の頃の日本人と現代日本人とは果たして同じ民族なのだろうか？と思うことはあつても比べてみようとない。しかし日本人という民族の資質そのものが、たかが百年や二百年で変わつてしまつとは考え難い。だから今も河井継之助が語られ、近年更に注目されているのだと思つた。思えば河井は成功者では無い。しかし強烈な「生き様」があつた。結果がすべてという世の中だつたらどうに忘れ去られていたかも知れない。河井を語るといふ事は実は日本人の生き様そのものを表現しているのかもしれない。

— 相場純夫 (燕市)

● 河井がの写真を

稲川著「長岡城燃ゆ」に載る写真に接し、継之助の妻すがに出遭い度肝を抜かれた。それは着付けの決め手、衿元の乱れにあつた。維新後のすがの生涯にも興味が湧いた。同氏著「河井継之助」に彼女の維新前後が描かれている。すがは匿われた寺で鬘を切り西軍を待たつたという。ここで将と気付く。すがは女の命である髪を切つた際、過去の私をもちり捨てたのだ。写真の頼み足元からは彼女の生き様が伝わってくる「着付けなど、どこでも良い」と。

— 新井戴子 (長岡市)

● 光陰矢の如し

戊辰戦争から百四十年の歳月が流

れる。五尺五寸程の一人の武士の姿が想起される。河井継之助である。当時家格が重きをなしていた時代、如何に三代の藩主に信を得ていたとは言へ、筆頭家老まで任用されたという事は、藩主に対する恩・義もさる事ながら、山田方谷から学び得た「実学」ではないだろうか。継之助が四十二年の生涯をかけて追い求めていたものは只一つ、「知行合一」の道であつたのではないだろうか。

— 小林芳郎 (長岡市)

● 史跡探訪入旅河井家の燈籠の巻

私は、史跡を一人で訪れるのが好きだ。数年前「河井家の燈籠」を見たと思ひ、長岡の河井邸跡を歩きまわつたが、当時は私邸の庭のため見れなかつた。(少し覗き見したことあり。羽賀家の皆様ごめんさい)そこへ史跡広場が整備されたとの情報。三月下旬の某日、燈籠を見ようと思つたところ広場は雪捨て場のような状態で入れない。周辺の道は、雪が全くないというのに…。時移り、今は記念館から思う存分見ている。

— 吉崎こすえ (東京都大田区)

● 蒼天を行く稲川館長の魅力

平成九年から続いています館長の「歴史講座」は野菊の会会員の希望が高い講座です。その魅力の鍵は、歴史の中に登場する人物や背景(政治経済文化思想)が語られるとき、館長の回路を通じて醸成される味わいがあり豊かな知識、思考の安定性と共に館長のもつ気圏は言葉の弾力と精神の弾力によって、仄かに響り立つものがあります。私は河井継之助記念館の主人公を繙く読書会に参加して、時空を超えた旅を歩み楽しみ

の時間をもっています。

— 佐藤三ネ子 (長岡市)

● 「峠」河井継之助との出会い

長岡出身の私はそれまで河井継之助を知りませんでした。継之助との出会いは今から約三十年前のことです。あるお客様に司馬遼太郎の『峠』を勧められ、読んでいくうちに「継之助」の生き方に共鳴し、すっかりファンになりました。学問は「実学」であるべき、「学理と行動は常に一体である」という陽明学思想に共感を覚えたものでした。以来、継之助ゆかりの地(慈眼寺、会津塩沢等)を訪れてきました。往時に想いを馳せながら…。

— 中山達雄 (新潟市)

● 先人を偲ぶ

司馬遼太郎氏の歴史小説『峠』によって、河井継之助の名は一躍国民的英雄として知れわたりました。私は今、元都立高校校長の有志から成り立つ会で地域文化向上のための歴史講座を開催しております。そこで郷土の先輩諸氏を紹介してその会の一翼を担っています。因みに米百俵の小林虎三郎、河井継之助、野本五郎翁、山本五十六等は越後長岡が生んだ多士済々であり誇りに思っております。今日に生きる我々もその名に恥じない生き方をしたいものです。

— 三條和男 (東京都武蔵村山市)

「会員の声」大募集!

原稿は二百字以内(題名、氏名は字数外)、事務局までお送りください。投稿を心よりお待ちしております。

遠方からの客人

●インタビュー② 講釈が必要なら、講釈師に頼むがよい

茨城県からお越しの二人連れの男性にお話を伺いました。お二人は職場が一緒とのこと。

河井継之助を知ったきっかけは？

— 学生時代、通学時に電車の中で歴史小説をよく読んでいて、その中に司馬遼太郎の『峠』がありました。そして社会人になってからまた読み直しました。



厚村大吾さん (31歳)
深井拓也さん (30歳)

2008.8月9日(土)

継之助の魅力はどんなところ？

— 考え方。正しいと思ったことはすぐ実行する強さ。自分達は会社員ですが、継之助のそういうところを自分の生き方や仕事に生かしたいと思っています。また、言葉にも魅力を感じます。例えば、藩主の世継ぎへの講義を断ったときの、「講釈などをするために学問をしたのではない。講釈が必要なら、講釈師に頼むがよい」という言葉が好きです。

展示を見ての感想は？

— 継之助の行ったことが、わかりやすくパネルに描かれていると思います。継之助のことを知らない人が来ても、わかるように展示されているところがとても良いです。

(インタビュー／櫻井・神保)



交流研修旅行

交流研修旅行報告

九月十三日、第二回友の会交流研修旅行として只見町を訪れました。

継之助が眠る医王寺での墓参、この夏改装された只見・河井継之助記念館の見学、戊辰百四十年の節目で開催された、河井継之助シンポジウムへの参加が目的です。昼食は、地元の名産をふんだんに取り入れた料理に皆さん大満足でした。下田会長始め、理事の方々にお手伝いしていただき、会員同士、また、只見の皆さんと楽しく交流できました。

新入会員ご紹介

(平成20年10月15日現在)

安達 良子	新潟県長岡市	斉藤 隆	新潟県長岡市	野々上康子	京都府精華町
石井 和彦	広島県尾道市	早乙女良子	東京都中野区	羽賀 友信	新潟県長岡市
伊藤 松雄	埼玉県春日部市	佐藤 榮二	新潟県長岡市	花原 洋	長野県富士見町
猪本 結彩	岐阜県可児市	佐藤 邦昭	新潟県見附市	東 亮一	新潟県小千谷市
岩佐加奈子	新潟県長岡市	佐藤 忠	新潟県長岡市	布施 修作	新潟県長岡市
岩田 和好	愛知県一宮市	佐藤 洋子	新潟県長岡市	古山 光久	東京都練馬区
梅田 雅文	愛知県半田市	沢目 健介	新潟県長岡市	星野伊佐夫	新潟県長岡市
大井 俊哉	東京都西東京市	関川 正利	新潟県新潟市	星野 紘子	新潟県長岡市
大野 檀	東京都国分寺市	高橋 ムメ	新潟県長岡市	堀井 章	東京都調布市
大森 藤雄	新潟県長岡市	高山 智一	東京都北区	前新 和巳	神奈川県相模原市
大矢 宗作	新潟県長岡市	竹内 光子	新潟県長岡市	松川 勇	新潟県長岡市
岡村 律子	新潟県津南町	太刀川道男	千葉県市川市	松川 神饒	新潟県長岡市
小熊 正志	新潟県長岡市	田中耕史郎	千葉県千葉市	松宮 英治	埼玉県草加市
小黒美知子	新潟県長岡市	棚橋 剛	新潟県長岡市	松村 時男	大阪府吹田市
加瀬 英夫	千葉県銚子市	種田 三枝	新潟県長岡市	丸山 誠	新潟県長岡市
金山 哲也	東京都町田市	田村 哲郎	山口県長門市	有めぐみ工房	新潟県長岡市
川井 直樹	東京都世田谷区	土田 洋資	新潟県三条市	山田 忠子	新潟県長岡市
河田 朋子	新潟県長岡市	寺本 豊和	埼玉県さいたま市	山本 正	新潟県見附市
桑原 康雄	神奈川県相模原市	外山 康男	新潟県長岡市	百合本百合子	新潟県長岡市
郷 康夫	新潟県長岡市	南雲 耕平	新潟県長岡市	吉武 一郎	愛知県日進市
小坂 喜久	神奈川県横浜市	西田 吉秀	奈良県生駒市	若山 裕司	岐阜県垂井町
小谷 守正	鳥取県鳥取市	西山 芳紀	新潟県長岡市	渡辺 順介	新潟県長岡市

以上66名(アイウエオ順・敬称略)

河井継之助記念館 友の会について

●会員数／正会員:397名／協賛会員:81名(10/15現在)

●特典／①会報をご自宅へ(口数に応じた部数の会報を送ります)
②会員との交流 ③研修旅行や各種イベントへの参加など

●友の会入会手続き

- ①申込書に会費を添えて、事務局へ持参。
- ②申込書を事務局へ送り(郵送、FAX)、会費は銀行振込または郵便振込で納入。(手数料は本人負担)

●年会費 ※会計年度は3月31日まで

- ①正会員/(ア)小・中学生:500円 (イ)高校生以上:2000円
- ②協賛会員／一口5000円(法人の他、個人でも可)

●口座について

加入者名／	口座番号／	
河井継之助記念館友の会	郵便局	00560—9—96432
	長岡信用金庫関東町支店	普1032829
	北越銀行本店	普1764663
	大光銀行本店	普3011256
	第四銀行長岡支店	普1560562

●友の会事務局／河井継之助記念館

編集後記

●長岡で毎秋行われている「米百俵まつり」。先人紹介のコーナーに、今年はサブライズゲストが登場しました。ガトリング砲の製作者 R・J・ガトリング氏のご子孫、その人です。湧き上がった歓声のかたすみで、なんとなく誇らしい気持ちになった私。長岡人として、郷土の歴史に誇りをもって生きたいですね。(嘉瀬)



10月4日、記念館にて。ランス・ガトリング氏と、当館所蔵のガトリング砲(複製)製作に携わった内山弘友の会副会長の両氏を囲んで。

編集人 稲川明雄 嘉瀬宏美 樺澤幸子
櫻井良子 神保智子 伊佐春美
構成・目次・イラスト編集部
印刷・高速印刷株式会社